

Knowledge Report

IX Knowledge Inc. PR MAGAZINE

Vol.39 SPRING 2020

① あすへの対談 安藤社長が聞く！
日本最大の総合化学企業を支え続ける
システムインテグレーター
大きな経営環境の変化に
構造改革で挑む

ゲスト：勝呂 芳雄さん

三菱ケミカルシステム株式会社 代表取締役社長

⑧ ユーザーインタビュー
IKIのサービスが選ばれる“わけ”【25】
お客さま：アセットマネジメントOne株式会社

⑪ [特別企画]ブレイクタイム
どうすれば、人を変えられるのか、
会社を変えられるのか
斎藤 昌義氏(ネットコマース株式会社 代表取締役)

⑬ わが社の匠
トップ・エンジニアの軌跡② 徳永 亮

⑮ IKIソリューション紹介
RPA導入効果を最大化する方法

⑰ IKI社会貢献活動 ロボット&プログラム体験教室
プログラミング教育必修化元年 活動10年目に突入！

⑱ [コラム]
名画の中の風景

[今号の表紙]

日本三大桜の名所と言えば、青森県の弘前公園、長野県の高遠城址公園、奈良県の吉野山ですが、この写真は、高遠から伊那に戻る途中の三峰川沿いにある桜並木。遠くは、木曽駒ヶ岳などの中央アルプスが見えるパノラマ空間です。

【撮影】太田 隆

IKI ナレッジ・レポート vol. 39

令和2年4月1日発行

編集：アイエックス・ナレッジ株式会社

〒108-0022 東京都港区海岸3-22-23 MSCセンタービル

TEL.03-6400-7000(代) URL <https://www.ikic.co.jp>

本文中に掲載されている商品名およびサービス名は各社の商標または登録商標です。

安藤社長が聞く

日本最大の総合化学企業を支え続けるシステムインテグレーター

大きな経営環境の変化に構造改革で挑む

1970年、三菱化成工業株式会社とそのグループ14社の共同出資により設立され、今年2020年に50周年を迎える三菱ケミカルシステム株式会社。2017年に同社代表取締役社長に就任して以降、「二段レベルアップしたエクセレントカンパニー」へのシフトを目指し、構造改革を進めている勝呂 芳雄さんに、安藤社長がお話を伺いました。



三菱ケミカルシステム株式会社
代表取締役社長

勝呂 芳雄

Yoshio Katsuro

安藤 文男

Fumio Ando

情報システムをもつて グループに貢献する

安藤…寒い中、おいでいただきましてありがとうございます。まず、三菱という大きなグループの中の御社のポジションについて教えてくださいませんか。

勝呂…当社は三菱ケミカルホールディングスグループ（以下、三菱ケミカルHD）の一員です。

安藤…三菱ケミカルHDは国内1位の総合化学企業グループですが、グローバルでのポジションはどのようになっていますか。上位にはデュポン社がいますね。

勝呂…おっしゃる通りです。実は売り上げ順位の変動が激しくなってきました。中国企業がM&Aでどんどん大きくなっていますし、サウジアラビアの国営企業も上位に進出してきています。そのような中、現在、三菱ケミカルHDは6位（Fortune Global 500 - 2019 - Chemical）にいます。

安藤…三菱ケミカルHDの事業について教えてくださいませんか。

勝呂…三菱ケミカルHDには4つの事業会社があります。まずは三菱ケミカル。機能商品・素材等を製造・販売しています。次に、産業ガスおよび関連機器・装置等の製造・販売を行っている大陽日酸。そして、医療用を中心とする医薬品の製造・販売をしている田辺三菱製薬。最後

に生命科学インスティテュート。再生医療をはじめとした次世代ヘルスケア、デジタル技術の活用による新たなビジネスの創出を目指す健康・医療ICT、医薬原薬・医療中間体の製造およびカプセル製造による創薬ソリューションといった事業を展開しています。再生医療では京都大学 山中伸弥教授などのiPS細胞（人工多能性幹細胞）のインパクトが強いですが、一方で、2010年に東北大学の出澤真理教授等が発見したMuse細胞（ミューズ細胞・生体内に在する非腫瘍性の多能性幹細胞）があります。ミューズ細胞は安全性と組織修復性を兼ね備えた珍しい細胞であり、幹細胞治療の有力なソースとして注目されています。生命科学インスティテュートはMuse細胞を中心にやっている会社です。

そうした中で私どもは、三菱ケミカルの情報システムの機能会社という位置付けです。もともと三菱ケミカルHDの中には化学系事業会社が3つありまして。1つは三菱化学、もう1つは三菱レイオン、それから三菱樹脂です。その3社が一緒に、2017年4月1日に三菱ケミカルが発足しました。

安藤…なるほど。3社それぞれのシステム系の会社はどうなりましたか。

勝呂…実は3社のうちの三菱化学だけがシステム系の機能子会社を持っておりました。私どもの前身の変化システムだけ

が、いわゆるシステム系の機能会社としてあったわけです。

安藤…では3社の合併によって、システムの仕事としては2社分がプラスされたということですか。

勝呂…2010年に三菱レイオンが三菱ケミカルHDに入った時から、私どもは三菱レイオンにおいても実務的な仕事をしていました。また、三菱樹脂はもともと三菱化学とは非常に関わりが深く資本関係も太かったので、三菱樹脂のシステムの相当部分を変化システムが担当しておりました。ですから私どものミッションは、三菱ケミカルHDの事業会社およびそのグループ会社の情報システムをもつて貢献するということです。

当社は三菱化成工業とそのグループ会社の共同出資により1970年に発足し、今年で50周年になります。

安藤…それはおめでとうございます。

勝呂…50周年を記念した感謝の会を5月に開催することを予定しており、いまちようどお客様やパートナー様にご案内させて頂いていただいているところです。例年ですとお正月明けの新春の会で私どもの1年間の大きな方向性を簡単にお話しさせて頂いていますが、今年は50周年記念の感謝の会と一緒に、まとめて開催させていただきます。

安藤…5月ですと、オリンピックもまだ始まりませんし時期的によいときですね。勝呂…ええ。それまでには日本国内でも



勝呂 芳雄 *Yoshio Katsuro*

三菱ケミカルシステム株式会社 代表取締役社長

1956年生まれ。1981年、三菱化成工業（現：三菱ケミカル）入社。その後、20年間の北九州黒崎開発研究所での開発業務を経て、2001年三菱化学（現：三菱ケミカル）東京本社へ異動。2017年4月三菱ケミカルシステム代表取締役副社長執行役員に就任。同年6月より現職。趣味はゴルフ、読書など。

現場での経験を経営に

新型コロナウイルスが終息していることを願っています。

安藤…我々は本来、お客様のビジネスを理解しながらお客様と一緒にシステムを作っていくかないといけない立場にありますが、できていないところが多々あります。一方、システムのユーザーであるお客様の側でもITが分かる人は圧倒的に少ないのが現状です。勝呂社長は現場でのご経験が豊富と伺っています。現場でのいろいろなご経験を経営者として生かせる非常によいお立場におられるのかなと勝手に想像していますがいかがでしょうか。

勝呂…少し自己紹介をさせていただきますと、私は大学でも大学院でもケミストリーをやってまいりました。自分の専門性を生かせるということで当時の三菱化成工業に入社し、1981年から2001年6月まで20年間は北九州の黒崎開発研究所で開発に携わって化学製品のプラントをデザインする仕事をしておりました。

安藤…化学製品を生産する化学プラントですね。

勝呂…そうですね。実験室で製品が10g、100g、1kgとできて、世の中ではほとんど役に立ちません。それを



安藤 文男 *Fumio Ando*

アイエックス・ナレッジ株式会社 代表取締役社長

10t、100t、1000tと製造してこそ化学として初めて世の中に貢献できるようになります。私の仕事は、例えば100gから10tへと生産のサイズをアップする技術を作ることでした。

安藤…生産技術ですね。

勝呂…ええ。ケミカルエンジニアという設備を設計するような方になるのですが、私は化学プラントを設計する前の段階のデザインするという仕事をしておりました。アメリカではエンジニアリングケミストという表現があるそうです。そこは現場に非常に近いところですので、製造現場に入り込んでヘルメットを被って一緒にやって製造の運転もしていました。

2001年に、私は当時の三菱化学の東京本社に異動しました。そこでは研

働き方改革にかなり力を入れていると伺っています。

勝呂…私どもには構造改革を進めて変わっていくかないと存在価値が低くなってしまうという危機感がございまして、働き方改革と健康支援を二本柱とする健康経営で構造改革に取り組んでいます。

構造改革を進める背景には内部や外部の4つの大きな環境変化があると考えています。1つは、経営やビジネスの、あるいは業務のオペレーションに対して、情報システムの必要性や効果が従前以上に高まっているということです。情報システムがしっかりしていないと事業運営ができない時代になっているということですね。2点目はセキュリティリスクが高まってきているというこ

と。セキュリティ対応をしっかりとしないと事業が止まってしまいますし、そここそ破綻してしまうということもあり得ますので、セキュリティへの対応力を強化しなければいけません。3点目はデジタルトランスフォーメーション（Digital Transformation 以下、DX）の進展です。経済産業省が2018年12月にまとめた「DX推進ガイドライン」によると、DXは、「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位を確立すること」と定義されています。私どもにもDX分野の技術を

究開発を統括するようなことも3〜4年やりましたが、その他はビジネスに直接関わる仕事を担当し、2017年3月末まで本部長として情報電子本部にいました。そこは、半導体やディスプレイなどを製造するために使われる材料を製造・販売する部署でした。先ほどお話にありましたように、私どももお客様のビジネスを理解して一緒にシステムを作っていくかないといけません。そういう意味では、そうした現場での経験が非常に役に立っていると思っています。

経営基盤を揺るがす内外の環境変化

安藤…勝呂社長は健康経営に注目しつつ

持っている社員は相当数おりますが、今後はニーズが高まってさらに増やしていかなければいけない状況にあります。4点目は、我々の事業に大いに関わってくるのですが、クラウド化の進展です。私どもの経営は三菱ケミカルHDグループへのICTによる貢献で成り立っているわけですが、クラウド化が進むとある意味で我々の経営基盤が揺るがされます。そうすると、我々の経営基盤を違う分野に移していくかざるを得なくなります。

こうした環境変化に対応するため、危機感を持って構造改革に取り組んでいます。

構造改革を進めるための働き方改革

安藤…お話にもありましたように、DXが進展していくことでは、世の中は相当ダイナミックに変わっていくんだらうなど私も感じています。そのあたりに対応していくための構造改革ということですね。

勝呂…そうですね。構造改革を進めるためにまずは働き方改革で時間や人の余裕を生み出すことを目指しました。時間を捻出するためには、とにかく会議を減らすと。私どもはたくさん会議のある会社です。まず、毎週やっていた経営執行会議を2週間に1回にしました。2週間

に1回に減らしても困らないし、会議の時間が倍になるかというところでもなくて。経営執行会議を減らすと、それに繋がっている各事業部や本部での会議も必然的に減っていきます。加えて、自分の組織での会議の効率化を考えてくださいと各事業部長に指示しました。それでだいぶ会議時間が減りましたね。

あとは、業務をいかに効率化するか、です。私どもはシステム会社ですので、例えばRPA（Robotic Process Automation）の導入による業務の効率化やペーパーレス化に率先して取り組みました。それからグループウェアを刷新して、それに付随している機能でテレワークを進めました。2017年度は月の残業100時間以上の社員が30名いましたが、18年度は1名、19年度は1月までゼロで推移しています。

安藤…すごいですね。

勝呂…相当数いた残業100時間以上がほぼゼロになって、80時間以上も19年度は上期が数名でした。時間外平均も2017年度の25時間から3時間程度減少しています。その時間を自己啓発に回してくださいと。時間の余裕ができたところでは、勤務時間中にスキルアップやスキルチェンジのための勉強をすることもありです。加えて、自己啓発のために学ぶことにも会社が経済的な支援をしています。

安藤…働き方改革では女性にフォーカス

す。やはり睡眠の質は非常に大事だと思いますね。

勝呂…そうですね。そのことを一人ひとりが自覚する必要があると思います。私どもの経営にとって社員の睡眠の質はひとつの重要なテーマだと捉えています。

それから、これはたぶんIKIさんにご支援いただかなくてはいいところになるのですが、新しい仕事にスキルチェンジするときにはどうしても人が必要になります。そうなったときに、新人採用などで賄えないところはやはりパートナーさんをお願いしなくてはなりません。構造改革で今お話ししたようなスキルチェンジをしていく場合にもパートナーさんのご支援が必要ですね。

勝呂…おっしゃる通りですね。例えばオーバラップするの人も人を育てるための経費になるわけですが、その経費は各事業部ではなくて全社で持とうということにしました。構造改革費用というのを予算化し、事業部損益にはその費用や評価を付けないということで進めています。

パートナーの存在が あつてこそ事業運営

安藤…御社とは長いお付き合いをさせていただいておりますが、今後、我々パートナー企業に期待することをお聞かせく

している企業も多いですね。

勝呂…ええ。例がよくないかもしれませんが、情報システムは重たいものを持つわけではありませんし、体力差が云々されない分野であると思います。

安藤…そうですね。女性に向いている職種だと思います。

勝呂…当社では女性がより活躍できるように制約条件を除いていくことが経営にとって大事だと考えています。働き方改革に取り組み始めて去年でちょうど1年経って、この1月からはさらにいろいろな仕組みをスタートさせています。これは女性に対してだけではなく、テレワークの朝の時間帯を広げたり一日の利用時間の制限をなくしたりしています。あるいは結婚されている女性がパートナーの都合で辞めなければいけないケースもありますので、ある期間は休職扱いにして、また仕事に復帰してくださいと。

安藤…復帰しやすくするということです。

勝呂…おっしゃる通りです。例えば出産で休職しているときも会社の状況などを定期的に伝えたり、復帰しやすいように復帰前には密に連絡を取り合うなどの工夫をしています。あと女性同士のネットワークを作って情報を共有したり、先輩からアドバイスできる仕組みも作っています。そのようなことを地道に少しずつ進めているところです。

ださい。

勝呂…私は三菱ケミカルシステムに来てまだ3年弱なのですが、非常に驚き、かつありがたいと思ったのは、私どもの仕事はパートナー企業のご支援があつて成り立っているということです。IKIさんのほか、相当数のパートナーさんが私どもを支援してくださっています。ですから、パートナーさんの存在があつてこそ、というのが私どもの事業運営のスタイルだと思っています。

私どもには200社以上のパートナーさんがいらっしゃると思います。新しいパートナーさんも増えていますが、長年一緒にさせていただいているパートナーさんとの間には信頼関係ができています。これまで私どもの社員や先輩たちが作り上げた信頼関係は非常に大きな財産だと思っています。特にIKIさんからは、非常に優秀なメンバーの方を派遣していただいています。それらの方については、頼むから返さないでください、と社員からも言われています。手厚いご支援を引き続きお願いしたいと考えています。



安藤…最近では、某大臣が育児休暇を取得しました。男性が育児休暇を取ることについては賛否両論あるようですが。

勝呂…当社でも育児休暇を取る男子社員がずいぶん増えてきました。それによつて働きやすくなってくれば会社にとつてもよいことだなと、私どもは理解しています。

睡眠の質の向上から 社員の健康を支援

勝呂…当社では構造改革のためのもう1つの柱である健康支援にも取り組んでいます。システムエンジニアは睡眠の質があまりよくないと従来言われていますので、睡眠の質を上げる取り組みを始めました。睡眠の質が上がると生活の循環もよくなつて仕事の効率も上がってくるということです。ある医科大学と契約を結びまして、いまは私どもの持つているデータと睡眠専門の教授が作成したアンケートの結果ともマッチングさせて課題を抽出しているところです。来月くらいには処方箋が出てくる段取りになっています。それを我々の健康支援に生かしていくと考えています。

安藤…それは楽しみです。睡眠の質の向上は生活していく上での重要テーマだと思います。我々の産業では睡眠不足とメンタルが課題になっています。このあたりの重要性は私も感じているところで

さらに言えば、DXへの取り組みについても、私どもはまだまだ人が少ないのでぜひいろいろなご提案をしていただきたいですね。

安藤…当社も、お客様のDXに対応できるよう人材を育成していかなければいけないと考えております。また、DXを推進するにはお客様の目指すものと構

お客さま：アセットマネジメントOne株式会社

日頃「しっかりとしたモノづくりと高品質のサービス」を標榜するIKIのサービス業務が、お客さま・ユーザーに、どのように評価されているか…。システムそのものやシステム開発のプロセス、管理運用の業務品質など、各種サービスのユーザー視点から見たその効果・成果のほどを、ユーザーの方に直接お聞きすることにしました。題して「IKIのサービスが選ばれる“わけ”」



なか た みつ たか
仲田 充孝さん
ITシステム・事務本部
ITシステム統括グループ長

高いボールに 食らいつくIKIに 今後も期待

提供サービス：システム開発

今回は、高度な専門性に裏付けられた運用力を活かし、個人のお客さまから、国内外の機関投資家まで幅広いお客さまのニーズ・課題へのソリューションを提供するグローバル運用会社、アセットマネジメントOne株式会社さま。インタビューに応じていただいたのは、基幹業務やサービス業務などの業務全般のITシステムを担い、同社をITで支える、ITシステム・事務本部 ITシステム統括グループ長 仲田充孝さんです。

類を見ない大規模統合を 人材面でサポート

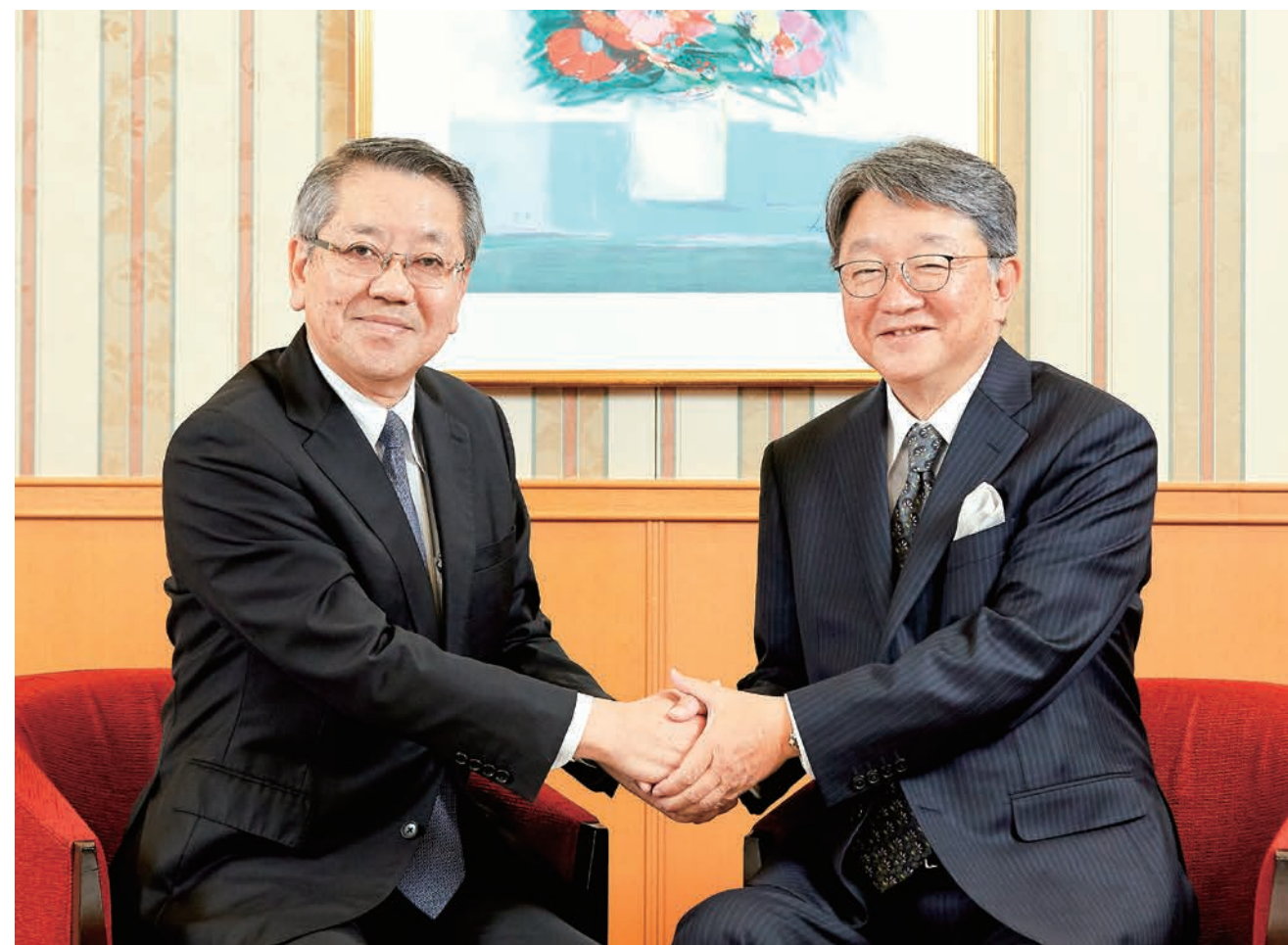
— まず、仲田さんが管理されている、ITシステム・事務本部ITシステム統括グループのお仕事についてお聞かせください。

仲田…当社はDIA Mアセットマネジメント、みずほ投信投資顧問、新光投信およびみずほ信託銀行の資産運用部門の4社が2016年10月1日に統合して発足した資産運用会社です。2019年9月までに、フロントシステムやバックシステム等の業務基幹システムの統合がやっと終わり、今が変換期のタイミングになります。

ITシステム統括グループにはITシステム企画部とITシステム推進部があります。企画部は主にシステムリスク管理やIT戦略企画・立案等の企画系を担当し、推進部はプロジェクトの運用・管理を担当する部署になります。私はこの2つの部の統括として、当社全体のITシステム領域を見ています。

— 御社の基幹業務やサービス業務などのITシステム全般を担当されているということですね。その中でIKIの役割はどのように見ていただいていますか。

仲田…IKIさんには特に統合のときに力を発揮していただいたと思っています。あまり類を見ない4社のシステム統合はかなり大変だった時期もありましたが、人材の供給面でのサポートを十二分にいただきました。単



築するシステムをどう上手にマッチングできるかが重要です。一緒に勉強させていただきながらやらせていただければと思っています。

最後に、休日の過ごし方を少し伺いたいと思います。趣味などはございますか。
勝呂…お話しするほどの趣味というものはございませんが、寒い季節には土・日は家で本を読んでいることが多いですね。

安藤…こういった分野の本をお読みですか。

勝呂…結構幅広く読んでいます。仕事に関わるビジネスの本や時代小説を読んでいます。

安藤…暖かくなるとゴルフでしょうか（笑）。

勝呂…そうですね。暖かくなると、月に3回くらいはゴルフをします。仕事関係の方々と一緒にさせていただくことが多いですね。

安藤…ちなみに、シャフトは？

勝呂…三菱ケミカルのシャフトですね。

安藤…三菱ケミカルのカーボンシャフトは、タイガー・ウッズが使っているから、在庫がなくなるくらいのごい売れ行きだと聞いています。

今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

に人が来るだけではなく業務を知っている人、業務は知らなくてもプロジェクトマネジメントがきちんとできる人を配置してくれました。資産運用業界向けの人材供給面では、パートナー各社かなり苦労があるという状況の中、IKIさんは我々が要求したレベルの人を配置してくれたというのがすごく印象的です。

——ありがとうございます。システム統合で、特に気を付けたことはありますか。

仲田…私はこれまで割と多く統合を担当していて、第一勧業銀行と富士銀行、日本興業銀行の統合によるみずほホールディングスの設立がちょうど20年前の2000年にありました。その時の経験で言うところ、結局、飲みニケーションが大事だなあと(笑)。一緒に飲みに行き、何かしら会話をすると、その後の垣根が取れてお互いにコミュニケーションを取りやすくなります。最近はその流れもあり飲みニケーションは少なくなりましたが、今回の統合時、最初の1年くらい順番で社員とランチを一緒にとって会話する機会を作り、横の繋がりの構築を率先してやりましたね。

実は、コミュニケーションを取るために、昔の上司を見習って日常的に行っていることがあります。それは、毎日1回は自分がある12階から現場社員がいる11階に降りていって「パトロール」をすることです。その上司は、現場の社員が打ち合わせをしたいと思っても、上司のスケジュールがびつりと埋まっていると、時間をとるのがはばかられるので、お互いに話しかけやすい機会を作るために時折フラフラと現場の執務室を歩き回っていました。私の1日のスケジュールも、多いときには30分刻みで打

ち合わせが入っていて、そのときの上司と同じ状況になっていますので、私も同じように現場の執務室を歩き回るようにしました。これを「パトロール」と称して(笑)、基本的には毎日行うようにしました。実際、フロアを歩いていると、自分から声をかけることもあります。だいたい1人くらいは相談や確認のために声をかけてきます。時には、IKIメンバーの方をイジることもあります(笑)。

高い球についてくる数少ない会社

——コミュニケーション面で、IKIメンバーはいかがですか。

仲田…IT業界に携わっている方は基本的にコミュニケーションが不得手だと感じます。ただ、IKIさんはもともとみずほ信託銀行の運用部門と昔からお付き合いがあり、そこでの業務知識を継続して持たれていることはすごく心強いです。業務が分かるということは



メージですか。

仲田…そうですね。課題はどの会社にもあると思います。ですから、こういう課題がありますねと指摘できるようになると、事業の広がりやパートナーとしての仕事の幅が出てくるような気がします。

——おっしゃる通りです。

仲田…本来ITというのは課題を解決する手段ですから、このような課題があるからこの技術を使います、という提案になると思います。ですから、我々が新たにビジネスを広げにいくときにも、我々のビジネスを理解した上で、いろいろな技術の中からどれをチョイスしてどのような作り方をしていくのか、というのはしっかりと提案いただくと大変ありがたいです。

並行して築いた働き方改革の土台

——昨今は働き方改革が話題ですが、何か取り組まれていることはございますか。

仲田…イントラネット更改の際に、社員の働き方改革に資するために、オフィス以外でも執務室と同じように業務ができるノートパソコンを全社員に配布しました。相応な投資をすればどの会社でもできる案件ですが、親会社のセキュリティ要件を満たした上で、通信環境を社員が用意し、同じデバイスを利用する

現場での会話ができるということだと思えます。そして、私に対しても、頭の中をきちんと整理した上で説明をされる印象の方が多くですね。

それから、私はけっこう高い球を投げるんです(笑)。その高い球についてこられる会社についてこれない会社がありますが、IKIさんはついてこられる数少ない会社の一つです。

——例えば、どのくらい高い球を投げられますか。

仲田…統合した4社は、もともと1社ずつが小さい会社や会社の部門であったため、各社で何かを作るときにそれぞれの対象領域には最適化されていても、全体最適にはなっていないことが多くあります。私は、4社が統合して大きくなったのだから部分最適ではなく、全体最適を考えるようにずっと言っていました。

実は今回のシステム統合のときに、ある領域のシステム化案件がありました。当社の業務は少量多品種ということもあり、その領域はすごく細かい機能の集合体でした。そこでIKIさんに、まずは部品を共通化し、全体最適解を考えて提案してほしいとお願いしました。当社のシステムでは業務内容が多岐にわたるので、一つひとつ作ると、似たような処理が何十個あるシステムを何百個も作らなければいけません。ですから、「このシステムのあるべき姿はこうだろう」と、何度も何度もIKIさんに伝え続けました。その結果、IKIさんは私の思いにきちんとついてきてくれて、コンセプトを理解し、きちんと機能要件等を整理した上で最適解を導き出し、かつ、しっかりとシステムを仕上げてくれました。

ことで、投資額を最低限にしつつ、社員全員が自宅でも仕事ができる環境を整えたのは、みずほグループの中でも当社だけだと思います。

また、ノートパソコン導入と同時期に全ての会議室に50インチの大きなモニターを設置しました。会議時にはノートパソコンをモニターに接続することで、自然と紙の印刷がなくなっていきました。ノートパソコンの配布からまだ半年も経っていないのですが、既に印刷費用が30%減と効果が出ています。

統合と並行しての対応は相当大変でしたが、十分、働き方改革の土台を作ったと言えると思います。

——最後に、よろしければ趣味について伺わせてください。

仲田…趣味は、下手な(笑)ゴルフとランニングです。年に1回くらいはフルマラソンを走ります。最近では昨年の横浜マラソンを走りました。また、当社は皇居に近いので、「皇居ラン」というサークルを作っています。私の部署だけではなくて各本部の人間が集まり、そのサークルで横の繋がりができましたが、最近はなかなか活動できていません。

一方のゴルフは、月に1〜2回くらいですね。当社にはゴルフ好きな人が結構いて、飲み会の回数は減りましたが、ゴルフの回数は増えました。ですから飲み会にお金がかからない分、ゴルフ代がかかっていますね(笑)。

——本日はどうもありがとうございました。引き続き、アイエクス・ナレッジをよろしくお願いいたします。

俯瞰したシステム提案で「共創」できるパートナーに

——これまで当社にとってよい話を多く伺いましたが、期待する点などはございますか。

仲田…これも先ほど同様に高い球かもしれないが、今お話ししたような会社全体を視野に収めたシステム提案をしていただければと思います。IKIさんに限らず、我々がこういう案件をやりたいと伝えた際に、そうした視点で提案いただける会社は今少ないように感じます。しかし、それができると、当社だけではなく他社にも選ばれる会社になるのだらうと思います。特に、IKIさんは業務を分かっているという方が多いので、業務を含めた会社全体を俯瞰したシステムの提案を期待したいですね。

——「共創」ができるようなパートナーのイ



いま、社会が、ビジネスが、生活が、私たちを取り巻く環境が、日々刻々と急激に変化しています。その変化のスピードは凄まじく、時として自分の立ち位置がわからなくなることがあるのではないのでしょうか。そうした時代に生きる私たちの「いま」と「これから」を考える」をテーマにした特別企画「ブレイクタイム」。仕事や勉強の合間にお読みください。

どうすれば、人を変えられるのか、会社を変えられるのか

齋藤 昌義氏(ネットコマース株式会社 代表取締役)

【執筆者プロフィール】



齋藤 昌義
1982年日本アイ・ビー・エム入社。営業や新規事業開発などを担当。1995年同社を退職、ネットコマース株式会社を設立し現職。多くのIT・通信関連企業新規事業の立ち上げをプロデュースするほか、講演、雑誌、Webメディア等の記事寄稿多数。著書に「システムインテグレーション崩壊」(2014)、「システムインテグレーション再生の戦略」(2016)、「【図解】コレ1枚でわかる最新ITトレンド[増強改訂版]」(2017)など。

「このままでは、大変なことになることは、よく分かりました。しかし、うちの社風というか、変えようとならない上層部の人たちが多く、その人たちを説得するにはどうすればいいのでしょうか？」

「これまでのやり方を変えようとならない人たちがたくさんいます。彼らを変えるにはどのようになればいいのでしょうか？」

「どんな説明をすれば、分かっている人たちを分からせ、行動を起こさせることができるのでしょうか？」

テクノロジーやビジネスのトレンドについて話をすると、いま自分たちがやっていることや自分の会社についての「違和感」に気付き、こんな質問を頂くことがあります。このままではまずい、何とかしなければと感じ、その思いの丈を打ち明けてくれるのです。そんな彼らに、私は、次のように答えています。

「人の考えや行動を変えよう、会社を変えようなんて、おこがましいですよ。自分を何様だと思っているのですか？」

そして、次のような話をします。

「あなたは誰かから、このように変わりたい、こういう行動をしろと言われて、分かりましたと素直に自分の考えや行動を変えられますか？自分にできないことを他人に期待し、思い通りにならないことに不満を述べて、イライ

ラする。そんな不健全なことに自分の大切な時間を費やすことに意味があるのでしょうか？」

「人は誰も変わりたいと自らが思わなければ、行動を起こすことはありません。誰かに言われて、仕方がないからと行動を起こしたところで、長続きしないでしょう。時間の無駄です。変わらなきゃいけない、変えなくちゃいけないと、本人が自分で気付き、自発的な行動を起こさない限り、なにも変化は起きません。」

「もしあなたが、人を変えたい、会社を変えたいと思うのなら、まずは自分が行動することです。自分が実践し、その姿を周りに見せることです。そうすれば、周りの人が気付いてくれます。そして、中には行動を起こす人もいるでしょう。他人を変えることよりも、自分を変えるための行動を起こすことです。それに気付かず、行動を起こさない人もいますが、それは仕方ないことです。そういう人たちに、いくら言葉を費やしても時間の無駄ですから、まずは自分が正しいと感じたことを自ら実践し、模範を示すことです。そうすれば、結果として、人を変えることができるし、会社も変わってゆくはずです。」

そして、次のようなことを話します。

「あなたが実践し、模範を示しているにもかかわらず、周りは変わらない、会社が変わらないなら、そんな会社は辞めてしまった方がいいのです。それはあなたの人生にとって、不幸だからです。あなたの成長の機会を妨げてしまうからです。」

自分が、自分のために行動することです。そういう姿を人は見て、気付き、行動を始めます。他人を変えるようなんて、おこがましいことを考えなくても、そんなあなたの姿に気付いた人たちは、自分で変わってゆくでしょう。

人生100年の時代になり、あなたのこれらの人生を会社に預け、他人の変化に期待して、うまくやろうと思っているのなら、とても虫

のいい話です。

会社で通用する自分になるのではなく、どこへ行っても通用する自分になることです。そういうあなたに共感し、行動を起こす人たちが増えてくれば、結果として周りの人たちは変わってゆきます。

そういう人を会社は必要としていますから、あなたの役割やあなたの職掌は広がり、あなたは自分の力で組織を動かせるようになります。そうなれば、あなたは、あなたの意志や行動で、会社を変えることができるようになります。

そして、そうなりたければ、次の3つのことを実践してはどうでしょう。

自分を変える3つの実践

1. 自分のための時間を作ること

行動するために最も大切なことは、時間を作ることです。例えば、始業前の1時間、オフィスで、あるいは会社の近くのカフェで自分のための時間を持つことです。そして、自分の専門スキルを高めるための勉強をする、どこに行っても通用するように語学を学ぶ、教養を広げるための本を読むなど、自分がやりたいことのために時間を持つことです。

すぐに仕事に役に立つ、待遇が良くなるなどで学ぶべきテーマを選ぶではありません。これは面白そうだ、やってみたいで選んでください。変化の激しい時代にあつては、いまの流行などすぐに変わってしまいます。そんなことに惑わされることなく、自分の興味や関心の赴くままにテーマを選び徹底して取り組むことです。

2. 人の繋がりを広げること

人生の大半は、自宅と会社の往復だけ。話をするのは、社内の人たちとお客様だけ。そんな人生、楽しいですか。世の中は広く、いろいろな考えや価値観を持っている人たちがたくさんい

ます。そういう人たちと交わることで、気付かなかった自分の可能性に気付き、広い視野を手に入れ、世の中から見ただ自分の価値を知ることができます。

幸い1ー1については、勉強会やコミュニティ活動が、毎日のように催されています。そういうところにとんとんと顔を出すことです。そして、その運営に積極的に関わってゆくことです。

人の繋がりを広げる最も有効な手立ては、たくさんの人との繋がりを持つ人と知り合うことです。そして、そういう人たちは、人の繋がりを広げようと、積極的に行動している人と繋がろうとします。自分もその繋がりの輪に入れば、人の繋がりはますます広がってゆきます。そして、それは人生の大きな財産になります。

3. アウトプットを増やす

ビジネスの世界で「知っている」とは「説明できる」と同義です。どれほど時間をかけて学んでも、それが自分の知識として使えるかどうかは文書にして説明する、絵に描いてみる、人に説明してみるなど、アウトプットして初めて確認することができま。アウトプットしなければ、いつまでたつても「知っているつもり」の知識に留まってしまう。

また、1のアウトプットを作ろうとすると、10のインプットが必要になります。ですから、アウトプットを増やせば増やすほど、インプットはその10倍のスピードで増えてゆくのです。インプットを増やしたければアウトプットを増やすことが、最善の方法です。

この3つを実践するためにお金や時間を投資することです。誰かに面倒を見てもらおうなんて考えないことです。他人に頼り、自分だけいい思いをしようなんて考えないことです。そういう態度が、あなたを成長させる原動力になるのです。

「働く」work

ドイツの哲学者であるハンナ・アーレントは、人間の行動を3種類に分類しました。

●活動(action)

自発的にやること。心からやりたくてやる純粋な行動。

●仕事(work)

誇りを持つてやること。金銭など特定の目的があるからやっているところもあるが、強制されているわけではなく、むしろやる気に満ちあふれている。

●労働(labor)

生きるためだけにやっていること。ベルトコンベアで流れてくるものを処理していくイメージ。やらないで済むならできればやりたくないこと。

朝の1時間は「活動」、就業時間は「仕事」、くっついて「労働」はしない。

どうすれば、そんな生き方ができるのかは、自分で見つけるしかありません。なぜなら、生き方は人それぞれだからです。そんなこと、理想かも知れませんが、理想だからこそ、目指すべき目標になるのです。そして、その目標を達成すべく行動すれば、人を変え、会社を変え、なによりも、どこでも通用する自分になることができます。

会社がダメだから、上司がダメだから、周りの人がダメだから、自分もダメになっちゃう。そんなことを心配する前に、自分が行動することです。それでも周りが変わらないのなら、そんな会社は辞めてしまえばいいのです。しかし、それができないければ、どこへ行っても同じことになるだけです。

ほんとうに、それでいいのですか？

「しっかりとモノシステムづくりと高品質のサービス」を掲げ、選ばれる会社を目指すアイサクスナレッジ（IKI）。この強気レーズの裏付けは、他ならぬ人材にあります。そうした人材群をリードしてきた「IKIの現場の顔」トッペンジニア：今回の「わが社の匠」は、Javaによるフレームワーク開発に長年携わり、現在はブロックチェーンなどの先端技術に取り組む技術者として、イノベーションに繋げるビジネス企画を目指す匠、徳永亮です。（編集部／本文敬称略）

大手Sierの技術者だった父親のもと、当たり前のようにパソコンがある環境で育った。大学時代には、情報工学科でコンピュータを専門に学んだ。「ITの道に進んだのは自然な流れだった」と入社のかつかけを語る今回の匠、徳永亮。技術者として、新たな技術への興味が生き立てられたとき、そこにはいつも人との出会いがあった。Javaによるフレームワーク開発の技術者がブロックチェーンやAIなどの先端技術を扱う道に進んだ背景にはどんな出会いがあったのか。

「技術寄りの技術者に

IKIに入社した2000年当時、IT業界の現場ではJavaが使われ始めた時期だった。同年代のエンジニアと同じく、自身も入社後すぐにJavaに携わることになった。若い頃は、10年ほど社会インフラ系のお客様との仕事を中心に、さまざまなプロジェクトで業務寄りというよりは技術寄りの立場で経験を積んだ。それは、既存技術による開発で、特にJavaでの開発が多かったという。

しかし、技術寄りの道を進めば進むほど、従来の技術だけでは物足りなさを感じ、もっと技

根っからの挑戦者気質からか、せっかく勉強したディープラーニングだからと、新規事業企画の社内公募に応募した。しかし、残念ながら企画は不採用。技術的な知識には自信があったが、ビジネスに対する知見や企画力、提案力が不足していることを痛感した経験だった。

フレームワーク開発が収束に向かう中、一方で、新しい技術に携わるチャンスを探していた。そんなとき、最新の技術を活用した新規ビジネスの企画をやってみないかと声をかけたのが、徳永が応募した新規事業企画を審査員の立場で見ていた現在の上司である。ブロックチェーン技術に興味のある人材を探していた上司と新しい技術に携わるチャンスを探していた徳永、双方にとっていいタイミングだった。この誘いをきっかけに、ブロックチェーンという先端技術者の道へ進むことになった。この出会いが徳永にとって2回目のターニングポイントである。

また、業務としてブロックチェーンに携わる現在でも、ディープラーニングを活用した研究開発や学習は続いているという。社内公募の経験を糧に、今後は企画力やビジネスモデルを考える領域にも携わりたいと考えている。これからの技術者に求められるのは、技術だけでなく企画やビジネスのことも分かる人材だと徳永は分析している。

「楽しむための努力は惜しまない」のモットーを掲げて

長きにわたり技術者の道を歩んできた徳永は、「新しい技術を使って楽しい仕事をしたい」という。しかし、こう考えるようになったのは最近のことだ。きっかけは、新規事業企画に自ら立ち上がって応募したことである。事業化には

先端技術でイノベーションに繋げるビジネスを

ブロックチェーン先端技術部

徳永亮 とくながりょう



至らなかつたが、待っているだけでは面白い仕事は何も入ってこないことを実感した。「楽しく仕事をするための努力であれば、多少畑違いであつても惜しまない」と考えて動けるようになった。

しかし、常に楽しく仕事をしたが、仕事の中で楽しいプログラミングだけを行うことは難しい。技術が好きなのは、自宅や外部の勉強会など、仕事以外の時間でも技術を勉強するだろうし、自身もそうしたいと考えているという。その時間を作るためにも、「残業をしない」ということを大切にしている。

また、自分自身を「残業はしない方が成果が出るタイプ」と分析する。フレームワーク開発を

術的な調査を必要とする新たな分野への興味が生き立てられたという。そんな徳永を導いたのが、社内でも技術力に定評のあった当時の上司だった。上司に誘われて加わったプロジェクトでは、新たにフレームワーク開発を始めるころであり、最新技術を学びたいという自身の悩みに、偶然にもマッチした。

「このときの出会いは自分にとって本当に運

がよかった。大きなターニングポイントになった」と徳永は当時を振り返る。その後は、フレームワークの技術的な調査をメインとした研究開発に5年、さらにメンテナンス業務に5年と、約10年間、プロジェクトに携わった。高い技術力を持つ技術者との仕事から多くを学び、この出会いをきっかけに、業務内容だけでなく、自身の気持ちも技術寄りの技術者に変わっていった。

挑戦から迎えたターニングポイント

携わっていたJavaのフレームワーク開発の業務が終盤に差しかった2017年ごろ、次はJava以外の、新しく面白そうな技術に挑戦したいと考え、当時、注目を集めていたディープラーニングの勉強を始めた。そして、

行っていた約10年の間、できる限り残業はせずに成果を出してきた。そうして作り出した仕事以外の時間で、楽しく仕事をするために自身のスキルを磨いてきた。

「楽しく仕事をするための努力も、そのため

の環境づくりも惜しまない」というモットーからは、技術者としての向上心が垣間見える。

ブロックチェーンの先端技術者として

現在は、ブロックチェーンに関わる検証、実証実験といった業務に携わっているという。常に最新の情報をキャッチアップし、高い技術力を持つ社内のメンバーたちと、何か新しいことができればと日々期待を膨らませている。

そんな徳永の今後の抱負は、「先端技術でイノベーションを起こす」ことである。新しい技術の登場をきっかけに、従来とは異なる新たなビジネスが生まれる「テクノロジードリブン」、徳永の言葉で言えば「先端技術ドリブン」を目指している。

先端技術はビジネス的に見たときも、新しいビジネスモデルが生まれるところに繋がる。例えば、ブロックチェーンの特徴のひとつに、中間管理者が存在しない「非中央集権」がある。この特徴を活かし、中間管理者に利益を搾取されるビジネスモデルを変えることもできる。利益が正しく還元されることは、「Society5.0（先端技術を活用した便利な社会）」や「SDGs（持続可能な開発目標）」にも繋がると徳永は考えている。

今後もブロックチェーン技術は、大きく活用用途が広がると予想される。「先端技術ドリブン」を目指す匠から目が離せない。

Point 2 導入のメリットを多角的に捉える ～業務の効率化は当たり前～

RPAを導入することによって得られるメリットは、定量的・定性的、短期的・長期的とさまざまです。(表1)

業務が効率化されるのは当たり前。その先には、例えば、作業時間や人的稼働コストの削減だけでなく、それによって捻出された時間・コストで社員のスキルアップ、企業にとってより重要なコア業務への人材配置なども可能となります。さらには、経営基盤の強化、企業価値の向上へと繋がります。どこまでのメリットを享受すれば、自社にとって最大の効果を得られたことになるのか。さまざまなメリットを多角的に捉えて考える必要があります。

(表1) RPA 導入のメリット

	定量的	定性的
短期的	【生産性向上】 ・人的稼働コストの削減 ・作業時間の短縮 ・人的エラーの削減	【労働環境の改善】 ・属人化の解消 ・業務ストレス軽減 ・コア業務への集中 ・社員のスキルアップ ・不正防止（法令順守）
長期的	【経営基盤強化】 ・財務諸表の改善	【企業価値向上】 ・多様な働き方 ・優秀な人材の獲得 ・企業文化の変革、組織のイノベーション ・企業イメージ向上

Point 3 プロフェッショナルの視点を活用する ～RPA導入はシステム開発～

RPAは「プログラミングが分からなくても大丈夫」という謳い文句がある一方で、「ロボットの作成にはそれなりのスキルが必要で手間もかかる」「ロボットのメンテナンスが必要な事象がかなりの頻度で発生する」といった話を見聞します。こうした技術面のハードルの高さやメンテナンスの煩雑さは、導入を検討するユーザーにとっては大き

な障壁となり、導入後のユーザーにとっては大きな負担になります。その導入プロセスはまさにシステム開発。(図1)システム開発で培った技術力や業務改善のノウハウを持つプロフェッショナルの視点を活用することで、それらの障壁や負担をなくし、自社にとっての導入効果を最大化することが可能となります。



(図1) RPA 導入プロセス
POC*:有効性を検証するために行う小規模なRPA導入検証

システム開発のプロフェッショナル集団であり、共創するパートナーとしてお客様を支援するアイエックス・ナレッジは、RPAの導入効果を最大化する役割を担います。当社をさらに深くお知りになりたい方は、ホームページをご覧ください。



<https://www.ikic.co.jp/index.html>

IKIソリューション紹介

RPA導入効果を最大化する方法

急速に少子高齢化が進み社会を支える現役世代が減少、人手不足が深刻化している日本にとって、生産性向上は大きな課題となっています。こうした中、注目を浴びているのがRPA (Robotic Process Automation)。アイエックス・ナレッジ (IKI) においても、お客様のRPA導入を支援しており、これまでの実績をもとにその導入効果を最大化する方法をプライベートセミナーでご紹介しています。本企画では、2020年1月29日に行われたIKIプライベートセミナーより、RPA導入効果を最大化するために必要なポイントを3つご紹介します。



RPA導入に関するセミナーを実施しました！

IKIプライベートセミナーでは、RPAなどのビジネスオートメーションツールを、お客様のビジネスの現場でどのように活用し、効果的な業務改善を実現しているのかを、具体的な事例を交えて紹介しました。

開催日時 | 2020年1月29日(水) 14:00~17:00
会場 | 東京国際フォーラム ホールD1

RPA導入のポイント！

Point 1 RPAの得意分野を知る ～“定型”業務を代行するソフトウェア型ロボットRPA～

RPAは人が行っているデスクワークを代行・自動化するソフトウェア型ロボットで、人手不足を解消するツールとして注目を集めています。デジタル技術の飛躍的な向上も手伝って、導入企業はここ数年、増加の一途を辿っています。

そんなRPAが得意とするのは、一定のルールとパターンに基づいて繰り返し行う、いわゆる定型業務です。例えば、決まったフォームへのデータ入力や定期的にWebサイトを検索し結果を出力すると

いったもの。コンピューターならではの処理時間の短縮や365日24時間のフル稼働も可能です。また、データ入力時の誤入力などの人的ミスをなくすこともできます。

一方、入力フォームや検索するWebサイトのデザインが変更されてしまった、すなわち“定型”の枠からはみ出してしまったような場合、その状況に応じて人が判断しメンテナンスすることが必要となります。

プログラミング教育必修化元年 活動10年目に突入！



小学校でプログラミング教育が必修化される2020年度、IKI社会貢献活動「ロボット&プログラム体験教室」は活動10年目を迎えます。2011年5月の第1回開催以降のべ44回の教室を開催し、これまで700名超の子どもたちが参加しました。10年目の活動スタートを前に、2014年から当社活動をご支援いただいている粕江市放課後子ども教室コーディネーターの千葉桂樹さんに、プログラミング教育と企業への期待についてお話を伺いました。



千葉 桂樹さん
粕江市放課後子ども教室
コーディネーター

プログラミング教育を 通じて感じたこと

私がコーディネーターをしている粕江市立粕江第五小学校は、東京都教育委員会が小学校におけるプログラミング教育を推進するにあたって指定した「プログラミング教育推進校」になっています。指定された75の小学校では、2018年度からの2年間、必修化を前にプログラミング教育の実践や研究に取り組んできました。

プログラミング教育では、単にプログラミングスキルを身に付けるのではなく、あるゴールに到達するためのプロセスを考え、それに沿って物事を進めていくプログラミング的思考を、全ての教科にわたって取り入れていくことが求められています。例えば、体育。跳び箱を跳ぶにはどういうプロセスを踏めば跳ぶことができるか。それをプログラミング的思考で考えるといったようにです。

プログラムコードもそうですが、ゴールはひとつでもそこに至るプロセスはひとつではありません。子どもたちにもいろいろなタイプがいて、それぞれ違う能力を持っていると思います。

力を持っています。一人ひとりがそれぞれのプロセスをプログラミング的思考で考える。それがプログラミング教育のなかなと思います。

IKI社会貢献 活動への期待

企業の社会貢献活動には、グローバルな視点で環境や貧困などの問題に取り組む大きな社会貢献があれば、ローカルな視点で部分的に特化した活動に取り組む小さな社会貢献もあります。

IKIさんの「ロボット&プログラム体験教室」は後者に入るとは思いますが、そうしたニッチな部分に目を向けて社会貢献してくれる企業は少ないと感じています。多くの企業は規模が大きくなるにつれて、より大きな社会貢献に目を向けるようになっています。

IKIさんの教室は、子どもたちがプログラミング的思考を生で体験する非常に良い機会となっています。ぜひ、地域に目を向けたこうした活動を継続していったほしいと思います。

粕江第五小学校での 開催実績

2014年	21名
2015年	15名
2017年	18名
2019年	19名
計 73名	

清水 寛

してきました。今となつてはマイカーを利用できない高齢者の生活が不便になったり、維持するのに多くのエネルギーを必要としたり、人と人との交流が疎遠になったりと、そのつけがインフラ、環境、文化等の面で表れ、さまざまな社会的弊害が指摘されるようになっていく。これを見直し、街の空洞化を防いでいくという動きがコンパクトシティの考え方です。そのモデルが中世ヨーロッパのコンパクトな機能を持つ都市であるという。

街

の風格は、歴史を感じる城や教会、デザインされた近代的な建物のようなその街のシンボルばかりでなく、多くの人が長い時間をかけて積み重ねてきた文化や生活習慣が受け継がれて備わっているものだと思う。これからの日本の街づくりは、コンパクト化を進め効率化を追求していくとともに、ITをフルに活用した住み心地のよい活気のある未来都市を目指していくのであろう。そのような中でも、新しく生まれ変わる私たちの街が風格と個性を持ち合わせ、その一面の描写が名画のごとく称賛され、後世にまで語り継がれるようになれば何よりである。そんなことを思いながら初秋のデルフトを歩いた。

(顧問)

名画の中の風景

我が家の寝室にフェルメールが描いた「デルフトの眺望」が掛かっている。もちろん日本で開催された展覧会で購入したレプリカである。フェルメールは17世紀にオランダのデルフトで生まれこの地で生涯を過ごし、鮮やかな青と黄色を使って光と影を巧みに表現しながら描いた絵でその名を馳せている。彼が描いた絵は世界で35点ほどしか現存していないといわれ、人々の生活のワンシーンを描いた風俗画が大半を占めている。その中で故郷のデルフトを描いた風景画が2点だけ残されている、そのうちのひとつがこの絵である。

数

年前に、オランダのハーグにあるマウリッツハイスという美術館で本物の「デルフトの眺望」を鑑賞した後、舞台となったデルフトまで足を延ばした。絵画についての知識は全くなく評論することなどできない立場でありながら、ただフェルメールの絵が描かれた舞台を一目見てみようというミーハー的な思いだけからの旅ではあったが、絵で見ていた街を実際に散策してみると、初めて訪れた見ず知らずのこの街になぜか郷土愛すら感じられた。デルフトは中世のヨーロッパの面影を残す典型的な小都市で、広場を囲

むように教会の尖塔やゴシック様式の市庁舎、レンガ造りの三角屋根の建物が並び、街中には水路が縦横に走り、いたるところに外で食事ができるレストランやカフェがある。今でも広場では市が定期的に開かれているという。通りを歩く人々も陽気で道を尋ねると親切に教えてくれる。中心部を少し離れ、街の南を流れる河の対岸に立つて、フェルメールが描いた同じ場所からデルフトの風景を眺めてみた。旧市街のスケールは絵が描かれた当時と変わらず、教会や周りの建物の配置もほぼそのまま、名作の舞台を頑なに守っているようであった。一日あれば散策できてしまう車社会とは無縁な小さな街でありながら、人々がその空間の中で生き生きとした生活を送り、のんびりと暮らしている姿が目に見え、息づかいまでも感じられた。

コ

ンパクトシティの考え方がヨーロッパで広がり、日本でも関心が高まり、少子高齢化や環境問題を背景に持続可能な都市づくりを目指しているところと動きが出てくる。経済発展に伴う市街地の商業化により、住宅地ばかりでなく病院や学校、役所や文化施設までが郊外に移転し、無秩序に都市を拡大